銀座心中

小宮山蘭子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀座心中

【Ｎコード】
Ｎ９８０４Ｐ

【作者名】
小宮山蘭子

【あらすじ】
大正末期。カフェの女給・毬子は、作家・西寺と冬の銀座を歩いていた。「旅に出る」と言う西寺に「一緒に行きたい」と告げる毬子だったが……

師走の銀座には人があふれ、活気に満ちていた。朝から強く降り続いていた雪は、夕方になって少しおさまっていた。私は西寺一典という作家と腕を組んで雪道をゆるゆると歩いている。西寺先生がふいに、

「“地下鉄”って、知ってるかい？　乗り物じゃないよ。カフェの“地下鉄”」

と、尋ねてきた。

立ち止まり、下駄の歯の雪をとんとんと落としながら、「いいえ」と答える。

「女給さんが穴の開いたスカートをはいていてね、チップを渡すと、その穴から手を入れてあそこを触ることができるらしいんだ。大坂の方で流行しているらしいよ」

「まあ……」

「上方の人たちはたくましいね。だが、銀座一の売れっ子の君とは無縁の話だね」

また、粉雪が静かに舞い始めていた。ガス灯のぼんやりとした光に照らされ、綺麗だった。

私は、先生の眼鏡についた雪の雫を袖でそっとぬぐい、

「ふふ」

と笑った。

◇

私は、銀座のカフェ『れおん』で女給をしている。

『れおん』ではコーヒーや外国のお酒や料理をたしなむことができ、広いフロアでは毎晩ダンスや演奏が行われて賑わっていた。女給は三十人もいて、みな美人で上品な雰囲気のする子たちばかり。その

中でも私は西寺先生の言うようにとても人気があり、毎晩いろいろなテーブルから声がかかった。
『れおん』は他のカフェに比べて客筋が良く、文士や画家や役者といった人たちがたくさん訪れる。そういった人たちはほとんどが紳士的だったし、その傍らで毎晩面白い話を聞けたから、退屈することもなかった。もちろん、私たちを馬鹿にしたり、いじわるしたりからかったりする面倒なお客もいた。最近は、高いお金を払った客には女給に下品な奉仕をさせるというカフェが増えており、『れおん』でもそれが許されると勘違いして来る人もいる。だが、『れおん』の支配人は、あくまでも品のあるサロンや文化人の社交場として存在することにこだわり続けていた。

年の瀬はいつもよりたくさんのお客様たちで賑わう。私はテーブルからテーブルへ、休む間もなく動き回らなくてはならない。
「おーい、毬ちゃん、こっちに来てよ」
一人のお客が、私を手招きした。里原広樹という、今飛ぶ鳥を落とす勢いの若い洋画家だった。ここ数年、大きな賞を立て続けに獲り、世間でも大変な評判になっていた。端正な顔立ちをしているせいで女性からも人気があり、高価な絵が飛ぶように売れていると言う。そのせいかどこか奢っている感じがあり、嫌味な態度をとることもあった。
その日は、同じ年頃の若い人たちを三人伴っていた。
「この子が、『れおん』で一番人気の毬子だ。毬ちゃん、こいつらはみんな、僕の個展の手伝いをしてくれてる画家の卵だよ」
「いらっしゃいませ」
私が腰掛けるやいなや、画家の卵たちは競うようにコップを差し出して「お酌して」と言った。
「君たち、ちゃんとチップは用意してるんだろうね？　他の子なら５０銭で済むが、この子をつけるなら、１円は下らないぞ」
「い、１円？」

三人は顔を見合わせ、銘々懐から財布を取り出して覗き込んだ
「いいえ、そんなことお気になさらないで。里原先生からたくさん頂戴しますから」
「あはは、参ったな。貸してあげるから、君たちが売れたらちゃんと返してくれよな。まあ、期待せずに待っておくが」
里原画伯が煙草をくわえたので、マッチを擦った。その瞬間、ふと、別の人の顔がよぎった――西寺先生だった。が、隣のテーブルで歓声が上がり、その面影はすぐにかき消された。お客様の一人が強いお酒を一気に飲み干し、豪傑振りを披露しているのだった。
里原画伯は隣のテーブルを一瞥した後、私の手をとり言った。
「毬ちゃんには前から僕の絵のモデルになってと頼んでいるんだがね、これが、なかなか承知してくれない」
若い画家の一人が、「ああ、ぜひ見てみたいなあ」と、画伯のご機嫌を取るように言った。別の一人は、「いやいや、それこそ里原先生が気に入った女性を落とす時の手口ですよ、お気をつけて」と笑った。
「光栄ですけど、私などよりもっと美しい女性はたくさんいますわ」
里原画伯はとても良いお客様だったけれど、私はあまり好きではなかった。
「毬ちゃんは綺麗で、元気で、いつも笑顔で楽しそうだ」
「売れっ子だし、毎日が楽しくて悩みなんてないだろう？」
などと言う。ほめ言葉のつもりかもしれない。でも、そんなことを言われると何だか鼻白んだ。
誰かにわかってもらいたいとは思わないけれど、私にだって死にたくなるような夜もある。それを微塵も感じさせないというのは、カフェの女給として当たり前のことかもしれない。反対に、本当は気丈で性悪のくせに、はかなく幸薄い空気を演出して男の人を惹きつける子もいる。どんな方法で接客するかは自由だけれど、それは、接吻やお触りでチップを巻き上げるのと変わりないと思ってしまう。

作家の西寺先生に初めて逢った時、この里原画伯をはじめ、他の芸術家や知識ある人たちとは少し違った印象を抱いた。
最初に『れおん』を訪れた夜、先生は私の顔を見るなり、
「君は寂しがり屋で甘えん坊だ。店では誰にも悟られないよう振舞っていても、一人になったら、きっとめそめそ泣いてばかりだろう？」
と、言った。先生の煙草に火を灯すために、マッチを擦った。
「まあ、口説いていらっしゃるのかしら」
「いいや」
先生は深く煙を吐きながら、
「僕は回りくどい口説き文句なんて苦手でね」
「寂しがり屋で甘えん坊……なぜ、そうお思いになりますの？」
「そういう匂いがするからさ。それに」
コップを掲げて、
「僕も寂しがり屋で甘えん坊だからね。乾杯」
西寺先生は一人でやってきて、決まって窓辺のテーブルに座り、ビールを注文した。他のお客のように重い話を討論したり、酔って騒いだりすることはない。私は先生の姿を見かけると、みんなの輪からすり抜けて必ず先生のもとへ行く。先生と静かに話をするのが心地よいと思うようになっていたのだ。

◇

ある日、雑誌の編集をしているというお客様が、「西寺一典は、もう駄目かもな」と言っているのを耳にした。
「西寺先生？　このお店にもよく来られますけど……」
そう口を挟むと、
「うん。思うように書けなくなったらしい。この前、連載が打ち切

りになった」
　別の編集者も、
「借金が膨らんで、にっちもさっちもいかなくなっていると聞いた。そのせいで奥さんは実家に帰ったそうだよ」
「それを作品に昇華できるぐらいの強(したた)かさがあればいいのだろうが」
「そうだね、問題は環境じゃない」
　お金に困っている……とは、思えなかった。西寺先生は、店に来るたびに私に１円のチップをくれた。それに、いつも穏やかで余裕があって、切羽詰まった雰囲気など少しも感じさせなかったのだ。
　ぼんやりと考え込んでいると、女給の一人が寄ってきて肩を叩いた。
「毬子さん、支配人が呼んでいるわ。私が代わります」
「はい」
　支配人の部屋に入ると、窓辺に佇んでいた支配人は大きなため息をつき、「これ、見て」と厚い封筒を見せた。
「里原画伯の使いが持ってきたんだ」
　中には、私を正式に絵のモデルとして雇いたいのでしばらく暇を与えてやってほしいという手紙と、２０円という大金が入っていた。
「全く……」
　支配人は忌々しそうな表情で言った。
「だが、むげに断るわけにもいかない。行ってくれないかね？」
「あまり、気乗りしません」
　正直に答えると、支配人はもう一度「ふう」とため息をついた。
「そう言うと思ったが……彼は店にとって上客だからね、怒らせるのは、私としても本意じゃないんだ」

◇

　その翌日、西寺先生がふらりと店へ顔を出した。
　いつものように一人で、いつものように窓辺に座った。けれども、

ずいぶん疲れているようだし、痩せてしまったようにも見えた。あの噂は、本当なのかしら？　と、思う。私がビールを載せた盆を運んで行くと、先生は唐突に、

「なあ毬ちゃん、今度、外で会えないかい？」

と、言った。

「外で……」

「お芝居でも見て、ご飯を食べて……どこかに泊まろうか？」

「まあ……どうしようかしら」

これまでにも、幾度かお客様からそういう誘いを受け、ついて行ったことはあった。けれども、ただ食事をしただけだったし、それを条件にチップをねだったこともなかった。まして、自分から想いを寄せ、外でも会いたいと思った人など一人もいなかった。

そのうち、女給の中に「毬子は枕芸者と同じ。お客様と寝てチップを稼いでいる」と触れ回る子が出た。私はその子につかみ掛かり、支配人や仲間たちに止められるという騒動を起こしたことがあったのだ。それ以来、客の誰とも二度と店の外で会わないと決め、それでも一番人気の女給であり続けることに賭けてきたようなところがあった。

だけど、もしも相手が西寺先生なら、私は……

しばらく黙り込み、店の中央にある植物の鉢を見つめていた。蓄音機から流れていたクラシック音楽が、ふっと途切れた。その瞬間、自分でも思いもよらなかった言葉が口をついて出た。

「先生が、私じゃないと駄目だっておっしゃるなら、ご一緒します。どこまでも」

すると、先生は「あははは」と声を立てて笑った。

「君じゃないと駄目だよ。決まっているじゃないか」

息が詰まるような感覚になり、口をつぐんでいると、先生が口を開いた。

「ほらね、やっぱり」

「え？」

「そういうことを確めたいと思うのが、寂しがり屋で甘えん坊の証拠だよ」

◇

暮れも押し迫った12月のある日、私と西寺先生は外で会うことにした。

それはちょうど、初めて里原画伯のアトリエに行く日でもあった。私が行かなければ、あの若い大先生は面目丸つぶれ、きりぎりと歯を鳴らして怒るに違いない――そう思うと、なんだか笑いがこみ上げた。

粉雪の中、私と先生は銀座をぶらぶら歩いた後、映画を観ることにした。徳富某の小説を映画にしたという、『不如帰（ほととぎす）』という作品だった。

客席で、先生は私の足元に手を伸ばし、太ももを撫でたり揉んだりしていた。私が素知らぬ顔で、

「あの女優さんはなんて言う人だったかしら？　綺麗ですね」

と聞くと、先生は前を向いたまま、

「栗島すみ子。けれど、君の方が綺麗です」

私は先生の手に自分の手を重ね、指を絡めるように強く握り返した。

映画の中で、その女優が、

「あああ、人間はなぜ死ぬのでしょう！　生きたいわ！　千年も万年も生きたいわ！」

と嘆く場面があった。先生が耳元で囁いた。

「君もあんなふうに思うことあるかい？」

私は「さあ」と、答えた。

映画館を出ると、すぐ近くにあった高級料理店に入り、天ぷらや

串焼きを食べさせてもらった。
「私、牡蠣って初めて食べました。食べず嫌いだったの。だけど、とても美味しいわ」
「そうか。僕も好きだよ。揚げるのもいいが、生で食べるともっと美味しい」
「これはなあに？　“ぼんじり”って……」
「ぼんじりと言うのはね、鶏の尻尾のところだよ。とてもよく動く場所だから、筋肉が発達していて美味しいんだ」
　先生はいろいろなことを教えてくれながら、自分は日本酒を熱燗で少しずつ飲んでいた。
「ビールじゃないのね」と笑うと、
「ここでビールというのも無粋だろう。それにこれはね、東京じゃなかなか口にできない銘酒なんだよ。一口飲んでみるかい？」
　差し出されたお猪口を手にとり、そっと口元に運ぶ様子を先生は目を細めて見ていた。なんだか幸せそうだった。
「ねえ、先生はどんなお正月をお過ごしになるの？」
「正月かあ……」
　先生は料理を運んできた女の人に、「熱燗もう一本」と注文をした。そして振り向きざまに、
「正月はここにはいないよ、きっと」
と、答えた。
「どこかにご旅行？」
「いや……毬ちゃんはどうするんだい？　田舎にでも帰るのかい？」
　私は首を振り、
「実家にはもう待ってくれている人なんて誰もいないし、いつもどおり銀座で過ごすわ」
と、言った。そうして、お酌をしながら、
「ねえ先生、私も先生が行くところに連れて行ってもらえないかしら」
と、尋ねてみた。おそらく先生は「駄目だ」と返答するだろうと思

いながら、じっとその目を見つめた。
「明日の朝、君と別れてから、一人で立つつもりだった。もう帰ってこられないかもしれないよ」
先生は真顔で言った。
「かまやしないわ」
私も真剣に言った。
「『れおん』はいつ辞めたって良いのだし、どこへ行こうと貯金だけはたくさんあるから、仕事がなくったって当分は困らないわ」
畳み掛けるように言う。
「そうか」
しばらくの沈黙の後、先生は、
「じゃあ、いっしょに行こうか」
と、言った。

食事が終わると、私たちは手をつないで、『兎月』という宿に向かって歩いた。

「本当に一緒に来るんだね？　後悔しないかい？」
「はい」

◇

暗い行灯の下で、西寺先生は先に布団に横たわっていた。私は肌襦袢だけになり、静かにその隣に入る。
先生の顔が覆いかぶさってきて、唇が重なった。それは、押し付けるような激しいものではなく、壊れそうなほど繊細で、静かな幕開けだった。首筋から乳首へ、そして鳩尾（みぞおち）から陰部へ、まるで体の中の何かを奪い取るかのように、先生の唇は長く小刻みに揺れ私のすべてを吸い尽くしていった。
全身を這う指は丁寧に肌の感触を確め、やがて湿った中心へとず

るっと滑り込み、音楽を奏でるように強弱をつけて震えた。私が耐え切れずにかすれた声をもらすと、先生もその合間に私の耳元で囁いた。
「気持ちいいかい？」
「……え…え」
「僕も感じるよ。素敵だよ。ここ、驚くほど狭い」
と言いながら、指をぐるぐると回す。
「ううっ」
目を開けると、先生は私の表情をじっと見ていた。そして、まるで子供の熱を確める時みたいに、私の額に自分の額を押し当て微笑んだ。
先生はそのまま、硬いもので私を貫いた。ゆっくりとした動きが少しずつ速くなっていき、それに応じて悦びも高まっていく。先生は片手で私の頬に触れ、やはり私の顔をずっと見つめながら動いている。私も、何度も「先生、先生」と声をあげながら、先生の瞳をうっとりと見つめ返した。
すると、最初は歓喜に満ちていた先生の表情が、やがて今にも泣き出しそうな幼子のように切なく歪んだ。
「どう……したの？」
「素晴らしいよ、君は。最高の女性だ」
それから先生は、一言もしゃべらなかった。私たちは、体の感覚とは全く違う所、もっと深い所にある何か――を、むさぼるように求め合った。競りあがってくる快感は、暗い心の底で感じている何かに色彩を与える花火のよう。何度も何度も弾け飛び、私たちを核心へと導いていった。

◇

すべてが終わった時は、二人とも声が出ないほど息が上がり、皮膚からは玉のような汗が吹き出ていた。全身が痺れたようで、動け

なかった。汗に髪を濡らし、並んで目を閉じている私と先生。
「こうしていると、私たち、まるで土左衛門(どざえもん)ね」
私が途切れ途切れに言うと、先生も
「はは……そうだね。二人そろって引き上げられて、土手に転がってるみたいだ」
息が整ってから、私は裸のまま布団を抜け出した。窓辺で中腰になり、曇った硝子窓を拭いて外を見ると、粉雪が大きな牡丹雪に変わっていた。私は、
「人間はなぜ死ぬのでしょう。　生きたいわ。　千年も万年も生きたいわ」
と、映画の台詞を口にした。
先生は天井を見つめて何かを思案しているようだったが、やがて片腕を伸ばし、「こっちにおいで」と言った。
「毬ちゃん、お願いがあるんだ」
「なあに？」
先生の腕枕は心地よく、お布団は暖かかった。
「君のことを小説に書きたいんだ、いいかな？」
「私のこと？　私とこうやってしたことを？」
「したことだけじゃないよ、もっといろんなことになると思うが……」
先生はもう片方の手で私の髪をすくいながら、
「だから、正月もここにいようと思うんだ」
「いいですとも」
私はすぐに返事をした。
「先生のこと、もう全部わかっちゃったんですもの」
「わかっちゃった……か」
「最初から、わかってました。どこに行こうとしていたかも」
「さすがだね」
外では冷たい雪の破片が激しい風に乗って狂ったように降り続き、止む気配はなかった。こんなに寒い時分に本当に水に入ったりした

らどれほど冷たいだろう。身を切られるような……って、きっとそういう時のことだわ、と思う。だから、溺れ死ぬのはお布団の中だけで充分。

「じゃあ2月になっても、春になっても、もうどこにも行かないでくださいね、先生に二度と逢えないなんて、私、困るわ」

先生は、ずい分と長く間をおいた後に、

「ありがとう。好きだよ、毬ちゃん」

続けて、独り言のように「やっぱり甘えん坊だ」と、囁いた。

「ねえ、喉が渇いたから、ビールでも取りましょうか」

私は勢いよく起き上がった。

「ビールか……だけどね、今夜、僕は全財産を使い果たしたんだよ。さっきここの宿代を払ったから、財布は空だよ」

先生はそう言いながら、クスクスと笑った。

「ふふ、なんとかなるでしょう」

私も笑い返し、着物を羽織った。

了

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9804p/

銀座心中

2011年10月5日13時01分発行